

国産サケと輸入サケの需給動向について-国産サケ需要拡大への道-

しみず いくたろう
清水 幾太郎 (調査研究課漁業経済研究室長)

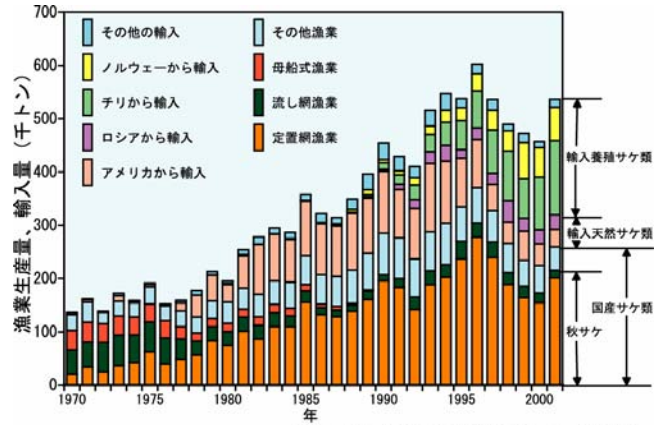
はじめに

わが国の水産業は非常に厳しい状況下に置かれている。輸入水産物の増加傾向、国内水産資源の不安定性、水産業の担い手である漁業後継者の問題等々、さけ・ます産業においても例外ではなく、価格変動に対する柔軟な経営戦略と体力のある経営体づくりが重要な課題となっている。平成17年のさけ・ます資源管理連絡会議においては、国産サケと輸入サケの需給動向を比較し、国産サケの需要拡大を図るにはどうしたらよいかについて講演した。その講演内容に基づいて報告する。最初に国産サケの需給動向の変化について概観し、国産サケ価格の短期と長期の変動特性及び価格変動に関わる輸入量と在庫量の影響について述べる。次に国際化したサケ需給バランスの変化について触れ、国内と国外での国産サケの需要を拡大するためのマーケティングの重要性について述べ、おわりに今後の課題について紹介する。

わが国のサケ・マス類の需給構造の変化

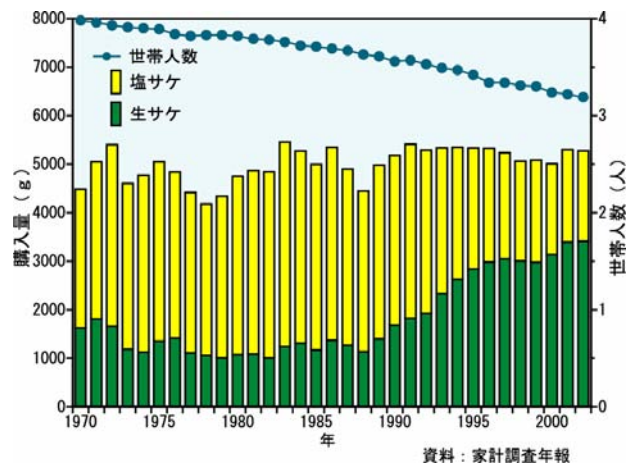
わが国の2004年度におけるサケ・マス類の総供給量は50万トンを超えており、内訳は国産サケ(秋サケ)が22.7万トン、輸入が24.6万トン及び他の国内生産量(カラフトマスとサクラマスの水揚げ、サケ・マス類の内水面生産、ギンザケ海面養殖)であり、国産と輸入の供給量はほぼ同量である。1980年代前半に北洋サケ・マス漁業が衰退し、代わって天然サケ・マス類主体の輸入とふ化放流技術の向上によって回帰した秋サケの水揚量が増加した。さらに1990年代に入って養殖サケ・マス類の輸入量が急増し、秋サケ生産量の増加と相まって供給量は著しく拡大した(図1)。

この間、世帯当たりの年間サケ購入量は世帯人数が減少しているにもかかわらず微増しているが、購入の中身を見ると1990年代から塩蔵物に代わって生鮮物(非塩蔵・解凍を含む)の購入量が急増し、サケ・マス類に対する嗜好が変化した(図2)。地域別にみても1990年では塩蔵物の購入量が全国的に多かったが、2002年では生鮮物の購入量が全国的に塩蔵物を上回り、特に西日本で著しく増加した。1990年代以降の生鮮物の需要増加は養殖サケ・マス類の輸入量増加と対応し、米消費の減少とパン消費の増加にみられる食生活の変化、核家族化の進展に伴う伝統的食文化の衰退、外食産業の発展等とも関連し国内需要構造



資料：漁業・養殖業生産統計年報、日本貿易月表

図1. サケ・マス類の漁業生産と輸入量の推移。



資料：家計調査年報

図2. 一世帯当たり年間サケ購入量の推移。

の変化が主要因と考えられる。また、1980年代半ばの円高によって輸入品が入りやすくなったことも輸入増加を助長・促進する契機となった。

国産秋サケ産地価格の短期及び長期の変動要因

北海道内の水揚港における生鮮サケ類の水揚量と秋サケ産地卸売価格(産地価格)について網走港を事例にみると、水揚量が前年より減少した年の産地価格は前年の価格より上昇し、逆に水揚量が前年より増加した年の産地価格は前年の価格より下がる傾向がみられた(図3)。この変動傾向から国産秋サケの産地価格は水揚量すなわち供給量が増加すると低下し、水揚量が減少する

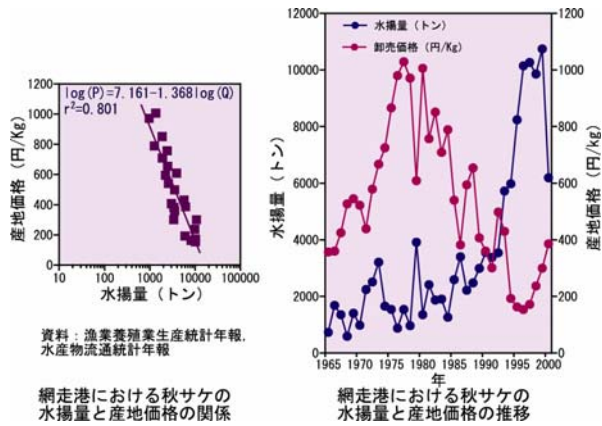


図3. 生鮮サケ価格の短期変動要因.

と上昇するという短期変動を示した。このことは水揚港における秋サケの需要には上限があることを意味し、水揚港における加工・保管等の処理能力の大きさによって産地価格が影響を受けると考えられる。

秋サケ産地価格の短期変動でみられた現象が長期変動においても繰り返されて産地価格の低下につながったと考えられる。長期的には秋サケ産地価格と生鮮サケ・マス類輸入量との間に負の相関関係がみられ、産地価格は輸入量増加の影響で低下した(図4)。また、秋サケ産地価格と生鮮サケ・マス類輸入価格との間には正の相関関係がみられ、輸入価格が低下すると秋サケ産地価格も連動して低下し、生鮮サケ・マス類の輸入価格の低下が秋サケ産地価格に影響を及ぼした。

秋サケ価格を巡る経済要因の因果関係 -産地価格形成要因に関わる輸入量と在庫量の変動-

天然サケ・マス類(天然物)の輸入量は1970年代後半から増加し1990年代前半以降減少したのに対し、養殖サケ・マス類(養殖物)の輸入量は1990年代前半以降急激に増加した(図5)。秋サケの産地価格に対する経済要因の因果関係を、1990年代前半を境に天然物主体の輸入時代と養殖物主体の輸入時代に分けて検定したところ、天然物主体の輸入時代では輸入「量」と因果関係を持っていたのに対して、養殖物主体の輸入時代では輸入「価格」との因果関係が認められた。換言すれば、需要が拡大していた時代は輸入「量」が影響し、需要が飽和に達した時代は輸入「価格」が影響したと考えられる。

生鮮サケ・マス類の価格の推移を札幌市中央卸売市場のデータでみると、1980年代の前半まで国産サケ類の消費地卸売価格(卸売価格)は輸入天然ベニザケ価格の下位にあるものの上昇傾向を示した。1980年代の後半から輸入され始めた

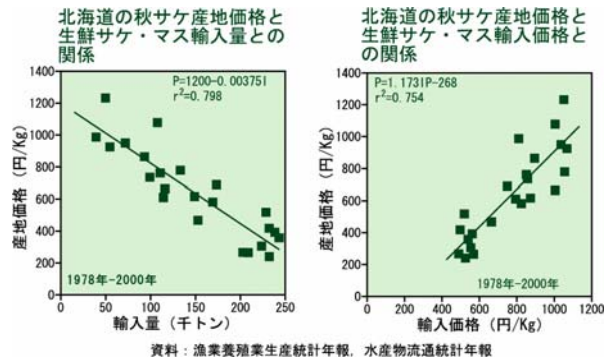


図4. 生鮮サケ価格の長期変動要因.

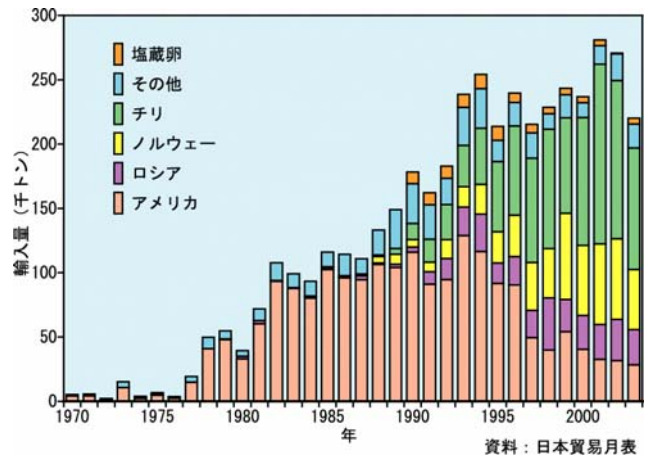


図5. サケ・マス類の国別輸入量の推移.

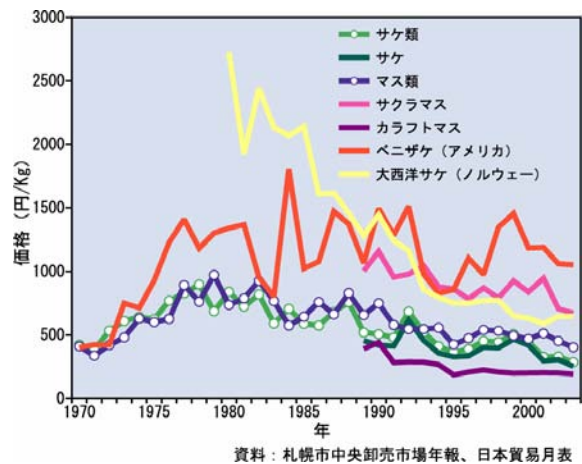


図6. 生鮮サケ・マス魚価の推移.

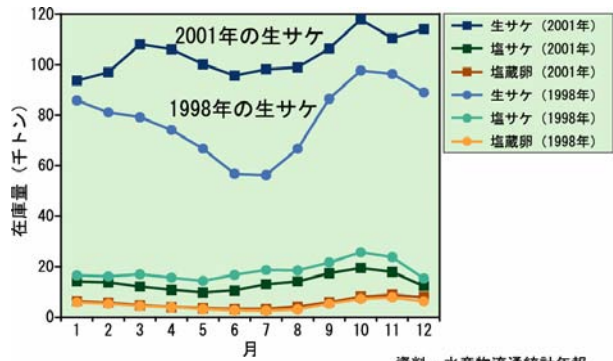
ノルウェー産の養殖大西洋サケは、輸入量が増加するにつれて卸売価格は低下した(図6)。こうした輸入サケ・マス類の急激な価格低下は、円高の影響や養殖技術の革新による低コスト化などの要因が考えられ、秋サケ価格にも影響を及ぼした。秋サケは年代を通してサケ・マス類の価格体系の下位に位置した。冷凍サケ・マス類の卸売価格の推移をみても1990年代前半以降、輸入価格

は急速に低下し秋サケ価格も連動して低下した。一方、塩蔵サケ・マス類の卸売価格では、秋サケ筋子の価格が今日に至るまで最も上位の位置にあり、秋サケ本体に比べて秋サケ筋子の需要は根強く、秋サケ筋子は市場における独立性が高いと見なされる。

養殖物が主体に輸入されるようになった1980年代後半から在庫量も増加し始め、供給過多に陥った。なぜ在庫量は増加し産地価格は下がったのだろうか？この疑問を解くために経済要因の計量分析を行った結果、秋サケの産地価格は水揚量のほかに塩蔵サケ卵の在庫量に連動し、秋サケ水揚量の増加あるいは塩蔵サケ卵在庫量の増加によって秋サケ産地価格は低下したことがわかった。また、輸入サケ・マス類の数量は輸入価格のほかに生鮮物の在庫量にも規定され、輸入価格の上昇あるいは生鮮物の在庫量の増加によって輸入サケ・マス類の数量は減少したことがわかった。以上の結果から在庫量と秋サケ産地価格及び輸入量が連動していることが明らかになった。

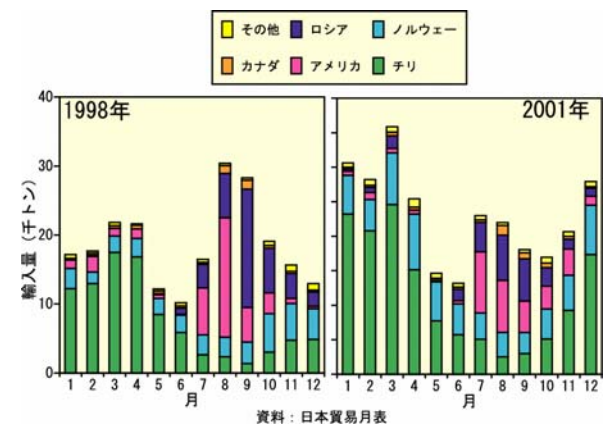
在庫量は1980年代後半から増加し始めたが、月別変化をみると1990年代後半までは期首在庫量、12月末(秋サケ定置網漁業終了後)在庫量、3月末在庫量、7月末(北洋サケ・マス漁業終了後)在庫量の順で減少したが、最近では3月末在庫量が増加したのが特徴的となった。さらに詳しく1998年と2001年における生鮮サケの在庫パターンの月別変化を比較すると、1998年では夏期に大きく減少したのに対して、2001年では明確な季節変動は見られず周年を通して在庫量が多く、特に秋サケの盛期である秋期から冬期に増加が目立った(図7)。

1998年と2001年の国別輸入パターンの月別変化を比較すると、1998年では夏期にアメリカ、ロシアからの天然物(ベニザケ主体)の輸入が多く、冬期にチリからの養殖物(ギンザケ主体)の輸入が多かった(図8)。これに対して2001年では夏期の天然物の輸入が減少し、冬期にチリからの輸入がさらに増加したことに加えてノルウェーからの養殖物(大西洋サケ主体)の輸入が増え、全体的に冬期間の養殖物の輸入が著しく増大した。したがって、最近の生鮮サケ・マス類の在庫量の増加は養殖物の輸入量が冬期間に増加したことが原因である。養殖物は天然物が輸入されない冬期間に輸入されるようになり、養殖物の価格が先行しその後の価格体系が形成された(図9)。冬期間の輸入量が少なかった時代は、秋サケがこの時期に消費されて在庫量が減少し、夏の天然物の価格が高まった。しかし、冬期間に養殖物が増加した現在は、在庫量の増加によって価格上昇が抑制され全体的に価格体系が低下したと考えられる。



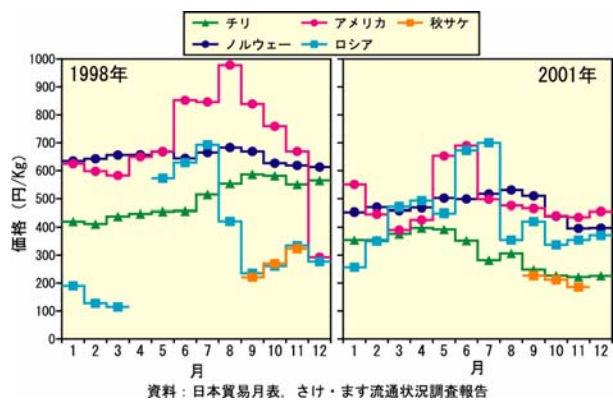
資料：水産物流通統計年報

図7. 生サケ、塩サケ、塩蔵卵の1998年と2001年の月別在庫量の変化。



資料：日本貿易月表

図8. 生鮮サケ・マス類の1998年と2001年における国別輸入量の変化。



資料：日本貿易月表、さけ・ます流通状況調査報告

図9. 生鮮サケ・マス類の1998年と2001年における国別輸入価格の変化。

国際需給バランス変化の兆候

天然物、養殖物を問わず、わが国には大量の輸入サケ・マス類が入ってきているが、近年秋サケの輸出が増加するなど、国際的な需給バランスに変化が現れ始めている。欧米では養殖物の安全性

に対する危惧から天然志向が高まっている。中国では欧米向けに加工輸出するため日本産秋サケの需要が拡大している。一方、日本では養殖物を大量に輸入し秋サケを輸出するなど欧米とは異なる動きがみられる。この背景には天然物と養殖物に対する価値観の違いが考えられる。すなわち、日本市場では価格を重視して養殖物を選択する傾向が強いのに対して、欧米市場では商品の天然由来を認知して購入するという徹底した天然志向のため天然物の需要が増加しているのである。

現在、日本では大量の養殖物を輸入し秋サケを輸出しており、中国では秋サケを輸入加工し欧米向けに輸出している。また、ロシアやアメリカでは漁獲変動によって天然物の供給量に年変動がみられる。健康、安全、天然をキーワードとし中国の経済成長が今後も持続すると仮定して将来の国際的な需給動向を予測すると、アメリカでは天然物の需要がさらに拡大する可能性がある(図10)。中国では加工用天然物の輸入が増大するとともに中国国内での消費需要の伸びによって養殖物の輸入が増加する可能性がある。日本では秋サケを含む天然物の需要が拡大することにより養殖物の輸入量が減少すると推測され、秋サケの需要を巡って日本と中国が価格面で競合することも考えられる。

国内外の需要拡大・マーケティングの重要性

秋サケの価格低下を押しとどめるためには在庫量を減らすことが重要である。この一環として中国への輸出がなされている。しかし、将来中国の国民所得が上昇すると中国市場の動向によって秋サケの価格が規定され、日本国内の漁業や加工業等が不安定化する恐れがある。これを防ぐためには秋サケそのものの市場価値を高める必要があり、鮮度保持、商品づくり、市場開拓、安全性維持が重要となる。従来少品種大量生産(プロダクトアウト)から多品種少量生産(マーケットイン)による商品づくりで市場を開拓する必要もある。具体的には価格以外に価値を見出す「こだわり商品」や輸入及び養殖物との差別化を図るきめ細かな「原産地表示」を徹底させることが大切である。

国産サケ・マス類の漁獲量と生産額の推移をみると、1980年代後半以降の生産額は減少している(図11)。すでにわが国のサケ・マス市場は市場成熟期あるいは市場衰退期にあり飽和市場といえる。飽和市場においては市場成長期とは異なるマーケティング戦略を立てる必要がある。市場成熟期には購入量の増大、市場開拓、競合製品の代替えとなる商品の開発等で対応できるが、市場衰退期には既にある代替製品の影響で需要が減

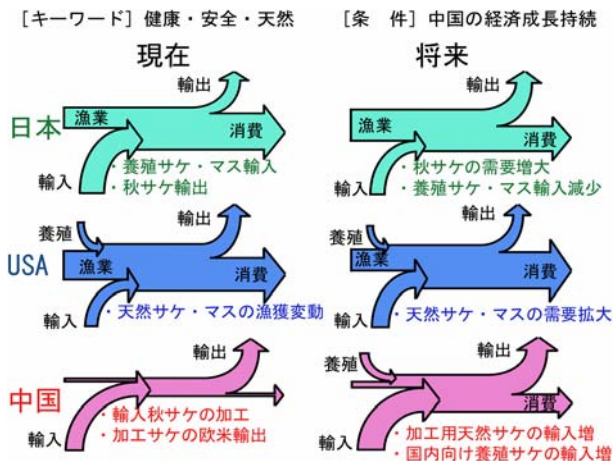


図10. サケ・マス類の国別需給バランス変化の兆候。

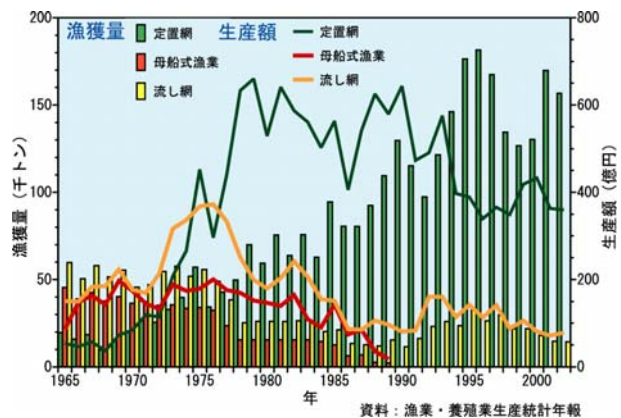


図11. サケ・マス漁業別の漁獲量と生産額の推移。

少するため、新たなブランド化や新概念の製品を提供する必要が出てくる。今日におけるわが国のサケ・マス市場のような飽和市場では競争相手が増えた結果、潜在的市場も大きくなっている。その場合以前のように少品種の製品で市場全体をカバーできないので、市場のある特定部分に絞って掘り下げることが重要になってくる。

マーケティングは消費者のニーズを発見し、それらを満たす製品を開発するプロセスである。市場を分析し市場を絞り込んで、それに合った製品を生み出すことが国内、国外を問わず必要である。製品の価格決定は供給者ではなく消費者であり、現行製品では満たされないニーズを調査し、アイデアを製品開発に活かし市場に認知させることを働きかけることが重要である。生鮮サケと塩蔵サケの一世帯当たり購入量を2002年の都道府県庁所在地におけるデータと比較すると、塩蔵サケの購入量が際だって多い市(例えば甲府市、奈良市)があり、市場を絞り込めば潜在的需要を発

